

# ミオヤの光

## 欣慕の巻

我等一度ミオヤの下をまよひ出て、より已來、久しく六道のちまたにさまよひ大ミオヤの在ますことを自覺せず、空しく生死のちまたに流浪したりき。翻迷還本家の捷徑は只々ミオヤを喚び奉りミオヤの大悲を仰ぐの外なし。ミオヤは慈悲深重にして我名を喚て我を頼めよと誓ひ玉ふ。我らがミオヤを慕ふて止まざる處に大悲の面影は彷彿として目前に在ますやうに感じられ候。我らはミオヤの絶對人格を尊崇し愛慕し、念々に尊容を想ひ、聲々御名を喚び、たとひ肉眼に見えねども、神には常に如來の光明照し給ふ前に在りて、口に稱ふれば如來は之を聞き給ひ、敬禮すれば如來は之を見給ふ意に念ずれば、如來は深くも憶念し給ふことを常に想ふて忘れず、折々は同行相集つて三昧佛の前に於て一行念佛三昧を修し我らか一心の金剛石が彌陀の大慈悲に研かれて、念佛三昧によつて寶石の能く磨く時に太陽の光が反映する如く、我らが念佛三昧にてみがれたる一心には彌陀の光明晃耀赫耀として反映すべし、常に絶對人

格の彌陀の前に在る憶念のなかには自づと稱名も溢れ出づ。彌陀は御名よぶ前に在せり。彌陀を離れざる處に我らが信念は眞實となれり。

黒き炭に火がつく時はおき火の紅赤にまた熱を發する如く我らが煩惱の罪色の闇黒も如來の慈光加はる時は恰も黒炭に火の燃つゝある如く若し炭を離れて火の燃ることなき如し我らが煩惱の心にこそ如來の慈光は燃べけれ。

あな辱なや、ありがたや、我らが暗の心も如來の慈光によりて活され、日々にかたじけなくまた喜びの日ぐらしをせらるるのも、みな大ミオヤの大悲の力に依らざるはなし。

此肉體は若も天に日光なかりせばいかにして活ることを得べきぞ。彌陀大悲の日光なかりせば我らが心靈はいかにして靈に活ることを得ん。人生いかに榮耀榮花に日を暮すとも若しも靈に活くるにあらざれば將た何の價値があらん。靈に活さんと欲せば常に彌陀太陽の光明に接せよ。彌陀の光明に觸れんと欲せば常に御名を唱へよ。彌陀の名を唱ふ時は大悲の面容宛然として口前に現はれん。……自ら彌陀の大ミオヤと常に離れざるに至りて世の人々にすゝめてみだの慈光に接せしめよ。

みだの光明のみ衆生を靈に活す靈力にまします。何人も一心に念佛してみだの光明に接する時は必ずきよきに復洒すべし。靈に活きて始めて價値ある命眞意ある生活にて候。願くば大悲のミオヤに接し奉れよ。

此頃のあつさに就てあなたは如何感じなされ申候や。此酷い熱さにて私共の一年の命をつなぐいのちね(稻)の實を充分に實らしむる大ミオヤの御恵があつさに候。此御恵のあつさより出来たる米を食ふて我らが命を續くる目的は何の爲めでありませう。此のからだは頓て藁のやうになつてこの靈こそは稻の果のごとくに未來の命の本となるのでせう。然るにからだの藁を造るためには毎日〴〵何萬粒の稻米の實を犠牲に供せしめて只骸ばかりを肥らしても若しも、心靈に彌陀の種子に依りてみだの子と

して生るゝ種子が充分に實のらざれば人生何の價値がありませう。

彌陀の子と生るゝの至誠心ならではならぬと申ことはわかりませんが。至誠に消極と積極とあります。只偽らざる計りでは積極の價値はない。積極的の誠とは中味の充實した誠である。中味の充實したとは至誠心に彌陀を信じ彌陀を愛し御國に生れたいとの欲望から、中の充實する所にとへば稻の能く果が實のりし成熟したやうな物である。能く充分に稔らざる種は播ても萌發せぬ。

誠と云ふは形式(容れもの)である。即ち彌陀の靈徳を受容る容れ物である。容れ物の心の器が眞實でなければ彌陀より受けたる靈妙なる徳も保ちておらぬ。けれども容れ物は完全でも内容が充分でなくては空虚では駄目だ。其誠心の内容を充たしむるのが即ち信と愛と欲とである。即ち彌陀を信じ彌陀を愛し彌陀の世嗣と爲りたいとの欲望である。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我が心に受容す。信なくしてはみだの眞實を受容れられぬ。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも至心の内に宿りたる彌陀の聖種は實に尊とい物である。

經に喩を以て婢女に轉輪王の御種(胤)を宿胎したる如しと。婢女の身は下賤なれども其胎内に宿りたる御胤はやがて轉輪王となつて四天下を領する聖王となる姓徳を有てゐる。其の如く今身は凡夫にて愚劣なれども心に宿れる彌陀の聖種は頓て不退の菩薩として後には無上覺位に登るべき性を有て居る。斯の如くに我々聖種を賜たる彌陀慈父に對しては實に愛樂せざるをえぬ。愛の對象たる彌陀は必ず最も圓滿なる完全なるすべてに勝れたる人格でなくてはならぬ。宇宙間にその人格として唯一絶對無比でなくてはならぬ。もしもより以上の人格者實在すと聞く時は我ら或は心をそれに遷す慮なき能はず。故に我らは彌陀は威神光明のみにあらず智慧慈悲一切の萬徳が悉く圓滿して一切諸佛に越えたる大靈的人格とし人格とし神格とし神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を献げておる。すべてに超えたる愛を以て只彌陀に容れられんとしておる

愛は衆生の命である。然らば彌陀は我靈の生命の源である。如來の靈的人格を愛慕して忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる愛樂である。毎朝々々東の海の清き水を以て面を清く洗ひながら昇る朝日の容を見ても直ちにいと愛する所の彌陀の慈顔を思ひ出さざるをえぬ。信あるも愛なくば甘味がない温味が缺ける血が通はぬ彼と我との間に、さあれ法尼のきみよ。あなたの心の奥に彌陀愛樂のあたゝかみと清き聖なる血が、彼と我との間にありなさるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざると云ふ迄には到らぬとおもふておるのでせう。百人一首などに戀の爲めに身をも命も惜しみやはすると云ふ様な程に彌陀 愛戀して是が叶はずば寧ろ死する方が苦はなくなると云ふまでに成て居らぬであらう。されども法尼よ。上は皮の方ではあなたがさまでに彌陀を愛しておる如くにあらはれておらぬでも心の底には愛して居る物である。いかにとなれば今現にあなたの信念の生命は彌陀に依つて未來永遠をかけて生命としておるのでせう。如來の實在を信じてそれに生命を依屬して永恒の我なる生命は彌陀にありと信じ愛して今現に生きて居るのでせう。こゝに於て若しも彌陀尊と云ふものは實には無きものであると云ふ確な證據が発見したならば、あなたの永恒の我の生命はいかに成るのでせう。それこそは落膽失神してしまふのでせう。彌陀の實にないものと云ふ事實が発見したならばよしあなたは其場合にさほどに落膽しませぬか、若し全く彌陀は無いと云ふ事實が判然としたならば御身は精神的に死ぬでせう。彌陀と云ふ靈の光なる生命につながつて前途の光明に眞の生命を生命としておるのにそれがぶつ切りられてしまつたならばどうなるでせう。それでも我は此の肉の命さへあればよいわと平氣にすまして居られるでせうか。若しも夫れが出来るとすればあなたの心の底に彌陀とつながれる愛の生命が生きて居らぬ故である、かやうな具合にあなたの心の奥底には我生命として陀彌尊を愛して居るに相違ない。内腑して居つてその信仰の熱が發しきれぬのである。實は其内腑して居る處が却つて病氣が重いかもしれぬ。

徳本行者が「あみだあみだと戀する人のむねに佛のたえまない」と詠まれた歌など

に彌陀愛慕の消息が洩れて居る。

人は愛する人格に同化する。

宗教は人格向上を宗とする宗教が高尚である。只極樂の樂を動機とする宗教は悪いとは言はぬ迄も人格向上の動機がない。彌陀の靈的人格を心の底から愛慕して彌陀大人格が常に眞正面に在りますと信じて其圓滿なる光輝ある大人格と常に離れず之を愛慕し信樂して心に念佛する時は愛慕する人格に同化して自分も如來に似合てくると云ふ所に宗教の價値がある。

されば二祖上人も念佛三昧は不離佛值遇佛と申して常に佛と離れず常に佛に値遇すと云ふ處に我人を指導して常に光明中に生活せしめ光明中に行爲せしむる大なる力がある。されば如來を愛慕して常に念々念佛して離れざれ。是念佛の宗致なり。

○

此頃のあつさにつきてかく感じ候。天地よろづは悉く法身の大ミオヤの御はからひによるものと信じ候えは、あつさのつよければ、つよほどありがたくおほはねばならぬと存じ候。いかにとなれば、私共すべての人草の一とせのいのちをつなぐいのちねてふ稻の實をよく養ひ能くみのらせんが爲めにかくはあつくなされ玉ふものと云ふことを知りぬれば、中々にあついでこごとといふなどはいかに勿體なきことに存じ候。

關西地方を五月下旬來巡教いたし昨日歸京仕候其御玉章に接して大ミオヤの御慈悲を慕ふ生れたばかりの觀音菩薩の麗はしき心のすがたを大阪の幾重の雲へだつそなたに懐しく存じ候。

法尼の君よ若し人生の最も高き理想と遠大なる希望なしに日暮しする人はいかに榮耀に明し榮華にくらすとも其精神に於ては實は憐むべきものに候。しからば人生の高き目的は那邊にあるものぞとなれば、宇宙間に最も高き至眞と至善と至美なる理想の天國なる聖き御國に昇る道を日々に念々に歩々に向上し行くことに候。口さきで誠心

もなき稱名のみにゆくと思ふはいかゞはしきことに候。高き御空の日の光のそれよりはいく層倍かは麗はしくきよく輝く大ミオヤのみもとにゆくことに候。

法尼のきみよ。更にあなたの眞に——一大事の望みにつきての動機につきて御問ひしたきはかやうなわけにてよ。あなたは御名を稱へて望みを遂げんとするに二つの動機がありてよ。一は彼の淨土の受樂無間なるを聞き、さやうな楽しい御國がありて只念佛にてゆかるゝならば稱名いたして望みを遂げたしものものと、いま一つは極樂の國の受樂といふ點につきてはいづれにしても只々宇宙間にまたとなき、たつたみひとりのえらい御方を御慕ひ申して、三世の諸佛も悉く稱譽讃歎して止まぬ其御方と共にはなれぬ身とならばかならず自分もよきひとになるに相違なし、然らばかゝる御方と共に離れぬ身になることなればたとひ火の中、地獄の中でも其の中にも精神中にはこれぬ樂しみと満足とは感じらるゝと思ふ、其御方のしたはしさに其御名が何人にも明すことも出来ぬ心の奥底から其えらい御方の御名が言はでは居られぬといふのと二つのうち何れがあなたの稱名の出て来る動機であるが御問ひ申したく候。

智慧と慈悲と萬の徳に充さるゝみひとりのえらゐ御方をしたひつゝ念いゝが日々念々に結晶して次第次第に佛念ひの一心がつゐに金剛石と成つてしまふたそれでもますゝ念々に念じていよゝ精神がかたくなつて一念の金剛石がますゝ磨かれてくると其念の金剛石に心靈界に輝きますみひとりの御方の光明は反映す。恰かも日光が寶石に反映するとくにて彼の金剛石と云ふ寶石は日中に太陽より受た光を含蓄して夜分も尚光りを放つので夜光の玉とも世に云ふとかや、それよりははつとくきよき麗はしき佛おもひにかたまつた金剛石の反射の光は盡く未來際に迄照りかゞやくとは聞きぬ、大阪の濁に潜みて居る寶石よ。絶待に大なる聖者の光に充さるゝ寶石よ。自から珍重したまへよ。自ら瓦礫などとなひ云ひたまひそ。瓦礫には宇宙間にいと變なるみひかりは反映せぬ。

吾祖のきみにはたとひあなたのみひかりは永しへに麗はしく月の如くに照り

渡れどもそれでも御名をよびてあなたを念ふ心のうちにこそすみませとはのたまひし導師のきみは、おもへば思はるゝ中、而してはなれたくてもはなれることの出来ぬ親密の結合のふたりの間であるとのたまへり。それがうらやましくはないのであらうか。いなうらやましくもなし。いかにとなれば自分を寝てもさめても抱擁して居る御方であるにあとあなたも答へるのでないか。

彼安倍の某が大唐國の高樓にのぼりて天の原ふりさけ見ればと云はれた言葉に、今三千里の波濤を超えて此の國に来て何一つ本國にて見た物もないのに天のはらにさやかなる月は本國の春日の三笠山に眺めたそれと同じ物であらうか將たもろこしの月であらうかといふた。

もろこしは愚か萬國の何の端にゆかうとも一月であることは云ふまでもなし。昔釋尊しやら双樹の下に涅槃の枕を照したのも宗祖の歌に詠みなされた月も今此空を照し居るも皆一つ月なるを、それと等しく釋尊が有ゆる言葉をつくして響たゝえたる彌陀如来かまたしやかむにの心のうちに輝て居るみだの光りも、三世諸佛の御心を照します彌陀も宗祖のむねに光を放つて居るみだもいま愚禰のむねに深く、此罪の深き可愛想な奴よとあはれみのかゝつておるも同じ彌陀にて候。

あなたは知るや否や、ねてもさめてもあなたの胸のうちに一息く出入なされ玉ふみほとけも本々一つの御方にてあることを。導師のきみの憶念は念はるゝと云ふのは如来と衆生との間にはかりなく同じ、一りの大ミオヤの子どもどうしのことなれば、大阪に居る子どもとはこゝに居る子にも矢張りおもへばおもはるゝので本とうに大ミオヤをしたふ人ほどしたはしきものはなく候。

大ミオヤはいかに我等を見そなはし玉ふらん。  
我は永しへに可愛き汝を見つゝある故に、汝もまた親しみ我名オトサマ（ナムアミダ佛）と呼べよまことに我は汝のオトサマである故に慮なく我をオトサマと呼べよ。我は汝を離れてより汝の父の光を背にし六道輪廻の闇のちまたを我が質の里

と謂ふてあるをいか計りにか氣づかふて居ることよと、ミオヤは永しえに我らを憐み玉ふならん。  
されば君よ、大ミオヤの慈悲な忘れ玉ひそ、何時でも何處でも晝も夜も、行往坐臥にもしばしも離るゝことなきミオヤを眞實にしたはしくおもひなさるのでせう。また懐かしくしたひなさるのでせう。

世に空海上人の道詠とつたてて、  
空海が心のうちに咲く花は  
みだより外に生る人はなし  
との道詠につきて兩三人の人の思ひくゝに感したるさまを語り合ひける。

一人の曰く、私共は自分勝手の悪き心、朝から晩まで苦しみ惱みにみだされて居る折々は己が悶えに己れなからんかんともいたしがたなき時あり。此惱み悶えの心は何人に訴えてもウツベでは同情は寄せたるやうなるも其内心にはさても、愚痴の多き御方よと思ふて眞實に我が惱みをわけてくれる人はない。しかるにたつたひとり眞から我惱みにどん底から同情を以て私をあたゝめて悶えをあたゝかに融合して安らかにかへて下さる御方は阿彌陀佛のみにまします。十方三世の諸佛がたは私共の心の悩みを智慧を以て明らかに淺問じき奴かなと照見はし玉ふものゝ同情の慈悲を以て知り玉ふ御方は只一人のミオヤ許にてこそ。それでこそ我心の花を知り玉う御方にてましますなれと。

また一人の人は子を持ちて親の心をするとの道詠のやうに本とうに此兒は可愛くてよ、しつかと抱いて而してこの笑顔を見るときはいかに世は廣くてもこの位に可愛い子はこの世界にまた二人とはあるまいと思はるゝ。大ミオヤもナムと抱きつく私を可愛く思ふて下さる慈悲は、此子に寄する私の心のもつと、大きな深きものと思はるゝ。世の中に母たる人は數しらす多くあるとも私の見るやうに此兒を可愛く見ゆる眼

はまたと二つはなからうと思ふ。三世諸佛の御眼も實に青蓮花の眸は麗はしうましま

すけれども彌陀の慈悲の御目ほどにこの私を可愛く見なはし玉ふ御目はまたなきものと思はれる。

また一人の解するのには義理や人情などといふことは逆も禽獸などには恐らく解することは出来ぬだらう感情上の美といふことも彼等にはわからぬと思ふ。

私どもは人間の子でありてまた佛の子である。だから人間の子として成長の曉に人間の子としての事柄は解せらるゝ。けれども佛の子としての心がまだ發達できなければみほとけの心は想像もつかぬ。恰も犬には人間の情をくみとることはできぬと同じこと我等がみほとけの子たる佛性が順々と聞くに随ふて廣い／＼みむね大きなく御心を感じられた大ミオヤに融合して知見を興へられたる此微妙の心の深み、ミオヤより外に知る人はない。ミオヤと共に瞻めつゝある常樂我淨の園に眞善微妙の心の深みはミオヤより外に知る人はない。この麗はしき心のうちに感じて居る花は彌陀ならで誰かしり玉ふものぞ。

維摩經に如來一音に法を説き玉ふに衆生類に隨ふて各解し得ると。道詠に對する人々の感じ異方面より見て味ふ所こゝにまた妙味ありと思ふ。

○ 入日かゞやく方に我大ミオヤの如來様をお慕ひ申上ると共に同じく西の方に上諏訪の我なつかしき清き同胞を思はざるを得ぬ。千里の山百重の雲はへだつ共親しき心は最も近くして又近い如來の大光明の中に清き名を稱へつゝある上諏訪の清き同胞は彷彿として眼前にあり。夏の暑さもあつさを覺へざる唐澤山の念佛三昧會は心は淨土に栖遊ふ思ひありき。

○ 偈て其折りくり返し申述候安心の三の條件は願くばみ心にさざみつけて置いて下され度候。

一。所歸の本尊を確立する事。宇宙間に絶對に尊き又大慈悲なる彌陀如來を宇宙の本尊にして吾人のたゝに活ける本尊にまします。恰も此肉體は太陽の光明によりて活

るが如くに此精神は彌陀尊の大光明により靈活せらるることを信じて身心を献げて仕えたりてまつるなり。夜も日も後の世も此世も共に彌陀如來に献げし心を以て奉事したてまつるなり。

二。所求の目的。何の目的を以て如來に歸命信順し奉るかとなれば、如來の大光明の中に安住して光明の生活に入る事を目的とす。此世後の世共に大光明中なれども現在其光明中にます／＼信心増進する事を目的とす。

例へば太陽の光りによりて稻の實が日増に成熟するが如くに私共も如來の大光明によりて信心成熟して圓滿なる人格となり稻の實が能く成熟する時は必ず來年蒔く時は生産作用効用あるが如くに如來光明によりて信心成熟する時は體て淨土に生れて相好圓滿の身と爲る事が得らる。

三。云行。とは彌陀如來の聖意と衆生との親密なる因縁を以て如來の光明に衆生の心が攝化せらるゝの行なり。

光明名號を稱へて念々如來を信する時は如來の光明に攝化せられてます／＼信心増進すること例へば太陽の光明によりて稻の實が熟するが如くに信心が成熟する。之を如來の光明は偏く十分を照せども念佛衆生のみ光攝を蒙るとは此事にて候。

上來 此三條件が確に定まりたるを安心決定したる信者とは申すなり。願くば本より御決定には候へ共光明を蒙りて稻の實の成熟する如くにます／＼増進し玉はん事をお進め申進じ候。

○ 生者必滅は娑婆の習、老少不定は閻浮の掟一度人界に生を受けたるもの誰人も免れざるは無常の風に散り果つる事されば、

釋迦牟尼佛紫摩黄金の身も遂に娑羅双樹の下に滅を取玉ひ金剛不壞の御膚も赤柝檀の燈と共に消え玉ひぬ。

承はれば御息女米子様事此度到處に猖獗を極めたる流行感冒に侵さる處となり遂

一七

一九

に歸らぬ旅路に趣きなされしとの事、ア、いかに酷なる哉。無常の殺鬼しかしながら御信仰深き御家庭にあれば故米子の君には生年僅か五五の盛りなりしも知きに似たれども神靈は大ミオヤなる

阿彌陀如來の慈悲の光明に攝取せられて今は本覺眞如の都に於て九品蓮臺のうへにまたなきさとの身とならん。殊に久遠却來お別れ申たる慈悲のおやさまと父子相迎の暁、

あみだ如來の慈悲の瞬に久しく別れてより已來、六道流轉の生死の苦を出で此度の大ミオヤのみ前に詣て大悲の妙法を聞きまつり無生忍を悟ることも間近になりぬべし。

就て残りたまひし御兩親様並におん妹子様等の悲しみの程は實に察するに餘りありと雖も悲しみ深かければ深きほど如來大悲の本願に深くおすがりなされて先き立ち米子の君の御手向としても只々

大ミオヤの慈悲の光明の外に途々の闇を照す光りはなきものなればひたすら慈悲のみなを稱へて御回向なされ玉ふやふ是非へお進め申進じ候。實に思へば悲しき世の夢かうつゝかうつゝとも夢とも懐へじ有てなければと巴の前の詠せしが如くに唯願くば思出る度毎にますく稱名を稱へていよくおはげみの程を祈り候。

和泉式部が一人の娘小式部の内侍に先立れしに悲しみの餘り「諸共に苦の下には朽すして一人愛きめを見るぞ悲しき」と深く悲しみたりしがそれが縁となりて後には益々彌陀の本願にすがり至心不斷に念佛して後に彌陀の光明に靈化せられて深くみおやの慈悲の忝けなきを感じて、

「夢の世にあだに果なき身を知れと教へて歸る子は知識なり」と詠まれし昔をもふにつけても矢張悲しみの深ければ深き程如來大悲を頼む心も深く發して信心がいと深くならばそれにて先立し人も又後の人も同じく如來のお慈悲に深く頼みを掛けることになるものにて候へば返すくも悲しみをあきらめて念佛すべしとお進め申し候。

かゝる悲しみの深き程  
大ミオヤを頼む心も深くなるものなれば只大ミオヤのみなを稱へて頼み參らすべきことにて候。

なほくさく申述度くも候へ共今日は別時三昧の二日目にて全國中より數多くの同行つとめりて三昧念佛を修し申候。

御尋問に概略如此に候。

如來の御影を拜し中島僧正云々、是につき時代と機類に依りて何を是とし非とは定め難きも信心念佛の動機(安心)に二類あり候。甲は單に未來の幸福を目的とし乙は現在より宗教は人格の向上と永遠の生命を目的とす。甲は如來の人格を便らず唯た來の快樂の爲めに口稱念佛せば往生すと勸む、乙は自己人格向上と人格的如來の光明を仰いて人格靈化の願望を満さん爲めに。甲は動もすれば現代の人に云はしむれば墮落し易き宗教的動機とす。人格向上を意味する宗教には必ず人格的本尊を要す。故に釋尊御滅度の後に弟子等が白して曰く世尊滅後どなたを師として弟子等が指導を仰かんと。世尊曰く吾滅後汝等展轉して行せば如來の法身は汝等と常にあり。此法身を本尊とせよ師とせよと。我等は人格的本尊と常に離れざるを要す。若し如來と離るゝ時は日々の心行必ず惡道に流轉す。導師の圓光徹照して端正無比なるを想へとの御教信すべく候、また佛と離れざる三緣實に念佛者が人格的本尊の光明を仰くは有りがたきことにて候。

勅修御傳は宗祖は一は其時代に相應せんが爲めに一は萬機普益の爲にて候。若し宗祖今日出玉は、現代的に人を靈に活すべく宣傳し玉うこと必せり。

然るに世間の末徒愚蒙にして自ら淨教教義を明めず、せまき見聞に未だ知らざる所

は是淨教の教義にあらざる様に謂へり。夫らは先徳の淨宗建設の苦勞を慮らず、また進んで將來彌陀の光明を以て時機相應して衆生を信仰に活すべき使命の負ふべき任務を忘れて只自身らの淺き狹き枯槁せる心を以ていかに現代の行爲なる人士を度すべき哉を考へざる人の説には意をとらめ給ふ勿れ。

しかし中には舊式を強て保護せんとすの誠意より出たるものなきにあらざる故に強て悪くは取るにも及び申さず候。例へば法然上人に對する拈尾明惠上人の如き當時無双の徳者たりしが戒を以て佛法の生命と信じたりき。然るに法然上人彌陀本願の前には戒をも要せずと説く。明惠上人何ぞ驚がざるを得ん。法然上人を破佛法の魔と謂ふたのも無理はない。然し尙進んで彌陀信仰の佛教に戒を根本にするよりは更に一步進みたる宗教なるを自覺せずと云ふ點に至つては明惠上人の推邪論は舊慣を保護の武器として新たに建設せんと欲する法然上人の主義は少しも摧くことは出来ざりき。舊來を見るの眼は明なるも將來を洞觀するの目なきを云何せん。

我淨土の徒七百年の昔をのみ研鑽して我國民を七百年の昔に復回せんとするも已に産出して一年育てし小兒を本の母胎に回すことは不可能である。夫でも敢て爲さんとする如き寧ろ愚と云ふ外之なく候。

法然上人の卓見たる時代を救はんの精神を師として彌陀の光明を以て法然上人の御精神を世に復活せんと欲する、焉んぞそれ躊躇すべけん。將來百年に向つて突進せよ彌陀は大なる御力を尊宿に與へ玉ふ。

此頃東京にて世人に揚られて居る日蓮徒本多日生師は妙法本尊たる宗たるに拘らず専ら人格本尊を唱導して人格本尊なきものは宗教としての價値なきを呼んでゐる。然るに淨土宗徒動もすれば只後生往生の爲に稱名するのみを勤めて人格本尊に對する稱名として人格に活きんとすの信念なきは是宗教を死地に至らしむる所以なり。是活

路を開く進歩派と死地を保守する徒との分るゝ所なり。  
いき進まん如來の光明のなかに

○  
此頃野に山に黄に紅に染まりし梢を眺むるにつきても直ちに思はるゝは宗祖大師の

あみだ佛に染むるころのいろに出では

秋の梢のたぐひなうまし

との道詠にて候。宗祖大師と雖叡山の報恩藏に閉ぢ籠りて一切經に眼をさらし、いかにせば衆生とともに賢きも愚なるも同じく生死を出離いたさばやところを煩はせし折は或は經にまたは章疏を開きいづれの經によればたやすく生死を出づべき、いかなる法門にたよらば解脱を得べきものぞと、いまだ出離生死の門こゝにありぞと明めざるほどはこゝろを惱めたまひし心をわづらはせしことはいくばくぞや。膺心なされ玉うこと廿餘年のあいだ。善導大師の一心專念彌陀名號乃至順彼佛願故の文によりて深く彌陀の願意をさとす善導大師の御意をわかりてより何とも渡りに船を得し心地してすべての餘行をふりすてて専ら念佛三昧の一行にとゞめなされたまつた。それより巴來口に稱ふるところは彌陀の名號心に念ずるところは如來の御慈悲、年久しくいつしか彌陀の慈光に薰染して麗しきかくはしき彌陀の慈光にそまりし心かもしも色にも見えなば紅にそみしもみちのそのの如くになりがたいといはんか又かたじけなしといはんか嬉しくも尊うとくもよろこばしくも言の葉に云ひ得ぬすがたとこそなり玉ひしとかや。  
願くば吾が同胞のきみたちよ、宗祖大師の彌陀にそまりしこゝろの如くに我らも同じく寢てもさめても大悲の御名をとなへてますく濃き紅にそみなまほしと、梢のいろを見るにつけても吾同胞のきみたちに申述ぶること斯のことくに候。もはや冬の

はじめ寒さに向ふ折から皆様大悲の懐のなかにあたたかきひくらしのほと祈り候。

○

古い〜太古のむかしより新らしく〜毎朝東の海の水に面を洗ひつゝのぼる旭の光は何億萬年のむかしより今に至りて少しも古けた御面を拜ました事はない。彌陀無量光の光明は古い〜久遠劫の昔より新らしく〜十劫正覺の慈悲の面かけを衆生に向け玉うて毎日〜新らしく〜私どもの心を新にしてまたあらたならしむ。

光明のなかに新たに生れし初蓮のきよき吾同胞よ。日々にあたらに〜東方より出て来る旭のごとくに毎日〜大なる無量光如来の新らしき光明に彌す〜み夜も晝もいき〜したる光明中に價値ある生活なされんことを祈り候。さて新聞の傳ふの所によれば御地方は非常な大洪水いばかりか御憂怖なされしことと遙かに察し上げ候。

すべてを大なるミオヤさまをたよりていかなる場合にも御はなれにならぬやうに是なん祈申候。

○

大ミオヤの清き光にきよめられしきみよ。ひとりの大ミオヤをいたゞく所のきよき我同胞よ。我は頼母敷くぞおもふ廣島のさとに大ミオヤの慈悲の光に麗はしき家庭の園生に芳はしきかくはしき心の花の咲きにけるを。

此ほどは他の同胞衆をもともなひなされて、停車場に於て懐かしき吾光明の中の同胞のきみたちに會はしていたゞきしを大ミオヤのおぼしめしと存じて嬉しく候ひき。古人の、めぐりあひてよしやそれともわかぬ間に雲かくれゆく夜半の月かな、と盡きぬ大ミオヤの大慈悲のななしをいはまじとおもふほどに別れの汽笛にいとまを告げねばならぬことなりぬ。

越後國に來りて殊に深く感じ候ことは、時代の宗教が勃興せりとも申しませうか何だか知らぬ非常に盛んに行はるることよ。

おもふ逆も長からぬ命を、大みおやに献けて油の盡るまで勇ましく努力する外に爲すべき様も無之候。明日はなき身とおもへば今夜眠る際も惜く感じられ候。また今夜死ぬと思ふと夢ならぬ永遠の命の覺むる朝を樂しみて働きたくてこそ。

此の世に何の爲に出で來しかは知らねども光明の裡にはたらくことは愉快にて候到る處に木魚を拍子として稱名の聲がいかにも勇ましく聞えて他にひびきわたるぬ。此れまた國民の精神の靈性を喚起する一端とも聞ゆれ、むかしの老人が眠さうな稱名の聲とはかはりていかにも青年の眼をさましさうなひびきである。西より東より三味の道場を開くからに來い來いと招かるるのは期せずして同じやうに人心が動き出したのとおもはるる。

千早振むかし〜より改良もせで、いつになつてもすたれぬものは毎朝毎朝新らしく新らしく出る日輪である。いかに電燈にも瓦斯にもおされすして相も變らぬ阿彌の無量光日である。矢張りいつに成つても人の精神界を照す日光は無量光のみとおもはる。名稱は種々にかえられるとも。されは無量光の外に吾人は靈界の日光を覺むる要もないとおもふ。春日明神の神詠なりと傳へられてける

またもまたあらばや人に教ゆべし、なむあみだ佛の六の外にも。

○

佛敎は聞思修の三慧を以て修道の要と示し候。求道者が何かの動機にて煩悶に耐へずして此煩悶より救済を仰ぐ所より一ら聞思の分濟に於て、法藏比丘が斯る衆生の爲に五劫思惟兆載永劫の暗罪に依ればこそ、此の罪惡の身も救はるるとの消極的の信仰



も煩悶を癒す迄の功徳は有べけれ、然れども靈の根本的に根を養ひます、靈に活き靈の花開き果を結ぶ生活の向上的に進むべき積極的の實を得るは開思のみでなく全く修慧即ち念佛三昧に自己の全生命を献げ靈に活き來るべき見佛三昧の妙修妙行にあらざれば釋尊の諸根悦豫姿色清淨光顏巍巍々乃至三相五徳の靈徳を得る如きの效果は得られぬものと存候。眞宗の徒が歎異抄などの信仰も信の一にかたぶきて向上的の靈に活くべき妙修妙行の缺けたるものも病的の信者には效能あるかも知れぬがどうも辨榮杯のやうに積極的の向上的に活動的に現在から光明生活を好む人間には格別感心出來不申候。

どういふものか一枚起請文や歎異抄はあまりに好ましくならずして大經の序文の釋尊が諸根悦豫等の三相五徳が即ち彌陀無量光の大日輪の光に反映したる釋迦の淨滿月の如くに彌陀の靈光に活き、現在を通じて永遠に向つて進む路が好ましく候。毎々念々相續して彌陀の心力に琢磨せられて自己心靈の金剛石が彌陀の日光に反映してゆく念佛三昧中に同志の善男女子相勸めて共に妙修妙行の慧を取ることも尤も快候。我等が煩惱の黒き炭も彌陀の靈火が燃えつく時には同行相勸して益熾然として盛なるに至る實にあたたかにしてまた快し此寒さも賈ほえずなりぬ、己が煩惱の炭に燃えつゝあるを中心として數十人を聚めては心々相續して念佛三昧を修す。忽ちに周圍の士女をして靈的烈火を發して實に快なり。

人生は向上の一路なり。彌陀の聖意を己が意として念々に進行し歩々に向上してまことに快たり。すべてに超えて愛し上る所の彌陀の爲なれば命を献けて嬉しい。彌陀と其ならば無間地獄の熱火に落ちも快く、紅蓮の水に閉ぢられてもいとほぬ。彌陀と離れては極樂と雖も望ましからず。

徳本聖が俚諺の「煙草吸ふひと戀する人の胸にけぶりのたえ間ない」と語ふを開きて、

「あみだあみだと聲する人の胸にほとけの絶え間ない」と

先づ頃久方ふりにて御目にかゝり、私は曾て其の先きに思ひたりき。まだあなたが幼きといふにもあらざりしも何事にもまだそれほどに成熟せざりし頃ほひに一度袖を分ちてより幾年を経たりけん。此頃はいかゞに成りしことと思ひだす。此の程は昔の其れとは異なりて御心ばへも成熟して深き精神上の殊に宗教上に趣味を感じてかたりあふふことを得たりしには實に何とも嬉しく感じたりき。久しく御面會もせざればあなたの御心も實は何の方面に向ふて發展したりけんとおもひたりしに、宗教に實に信仰をもつのにあらず、何分もの哲學的趣味をまでもつて談じ合ふことの出來るやうに成りしことにつきては實は何とも悦びに耐へませんのでした。君よ人間は男女を問はず假令いか程財に富み福に豊なるとも若し精神上に高尚なる理想また遠大なる志望また高等なる信仰のなきものは實に精神的に憐むべきものとおもふ。

君よきみが亡きおとうさんの心學に造詣したる底の精神的の遺傳とも申しませうか深き真理を味ふ性質をもつて生れたのは、あなたは精神上の幸福のひとなのよ。吾人は生れつき哲學的の傾きある性をうけて而して宗教を生命とする人の氣質として哲學的の趣味や高等なる宗教思想のなき人はどうもさつぱり氣に合はぬ。あなたのやうな性質の人がどうも好きである。しかし婦人女子にして高尚な氣品をもつておる人は實は稀である。さればとてあなたが哲學の書物を讀んだとかまた研究したとかいふわけではない。それはあなたの性質が女として哲學的の性質宗教的の性質をもつておるから談が合ふのである。愚痴はあなたのやうな性質の人を能く手を引いて宗教の研究の方にも信仰の方にも指導したいとおもふ。君よ人生の一大事である肉體上の事を放擲して仕舞へといふわけではない、できるだけ靈的問題の方に向て突進しなされ。キリストが言ふておる、天の鳥はあすの食ふことを少しも心配せぬ。それでも飢死

した鳥はないと。實にそうである。愚痴は先達て四日間の三昧修行をおすゝめ申たるときにあなたの答に、他の事柄はいつに成ても限らない何をさしおいても一大事の道の修行の事は是非いたし度とのあの精神が女子としてあなたに其勇氣とつよき意思をもつておることにつきては實にたのもしくおもふております。深川の富岡門前には是の如きの寶石の有りしとはおもはざりき能く玉師と成つて磨きあげて見たいと思ふ。宗教安心上のことにつきて。

宗教の安心と云ふことは三の條件があります。

一何の要求(目的)

二何の神を本尊とす、

三いかにして神の意と合一する行

一何も要求なしに信仰はできぬ。是につきて(一)、卑き信仰は形の幸福を求むるため(二)其上は未來の靈魂が極樂また天國に生れたいとの信仰(三)最も高き信仰は現在より未來永遠にまで大光明を被むりて神の光明中の生活と成つて人格圓滿に成りたるとの信仰。

二何の神を本尊として信仰する。是に卑しき信仰と高き信仰との別あり。(一)、現世界の山の神また川の神日月星辰等また天の御中主の神等の神を信じて現在の幸福を求むるの卑き信仰。(二)に夫よりも一段高い信仰の神は、未來の極樂に在ます如來さまとか天國の天の父さまとか云のを信する未來立派な國にて樂しくらすことのできるやうに信する。(三)一番高いのは宇宙に無量の神は在ませども一切の神佛を統一する程の如來なり、無量光如來は一切諸佛の最尊第一にして無量光無邊光等の十二の名ありて此唯一の如來が宇宙唯一の本尊にして永遠に活どふしの如來である。

三、いかにせば無量光如來の光明に攝取せられて光明の生活に入ることができるとなれば、唯いつでも私共の方に真正面に向ておる活ける如來なれば、光明名號(ナムアマミダ佛)を稱えて一心不亂に念ずればつゝには如來の光明を被りて、鷄の卵

が雛子に孵化する如くに私どもの信仰心も一心に念佛する時は如來の光明に攝めらるゝが故につゝには卵の中より孵化する如くに信仰心が開ければ、寢ても寤ても光明中の日ぐらしと成つて如來の思召にかなふ人となり、而して命終の時に正しく無量光明世界に生れて觀世音菩薩と等しき身と成ることを得。

かやうに安心をきめて念佛を以て常に如來と離れぬやうになり玉へよ。また後の便りに譲り申候。

○

經に云く一切有爲の法は夢と幻と泡と露との如く亦電の如く影の如し是の如く觀すべしと。

此世のあらゆることは春の夜のゆめの如く、夢の中にはまことと思へどもさめて見れば眞實ではあらざりき。よろづはみなまぼろしのごとく、しばらくは實に有るものと見ゆれども忽ちに消えはてぬればまことのものならざるを知る。

無量壽經に佛が仰せられて候。我いま汝らにかたる。世間の事を人は是によるが故に由て佛の道が得られぬのである。常につらつら思ひ計つてもろくのあしきをば遠ざけてすべての善きものをえらみわけてつとめて光を行爲べし。いかにとなれば愛欲も榮耀榮華も常に保つべきものにあらざればなり、みな當に別離すべし。眞實の樂と云ふものにはあらず。能く教をきつてつとめて精進すべし。そこで至心あつて安樂國に生せん願ふものは智慧明達にし功徳殊勝なることを得べし心の欲する所に隨て經戒に虧負て人の後に在ることを得ることなかれ。徳をつみ功を立てることに

於ては通途の人よりも先へすゝめ。との仰をうけたまはりて、彌勒菩薩の佛に申しあげますには、あなたの仰せらるる如くに貫心にこれを思ふに、世間の人々は實に其れに相違ありません。唯今あなたがひと人をあはれみなされて大なる道を顯したまふてこれによりて耳と目が開明きてまことに度脱を得ます。あなたの仰をうけたまはりてみな歡喜せざるものは有りませぬ。あなたがまはりなき所の御さとりをもてきか

せくださるために、あみだ佛の聲を聞たてまつり、すくひの道を得ましたので實に歡びにたへませす。心が開明することを得ました。

釋尊がまたみろくぼさつに仰られるには、汝が言ふごとく佛を敬つて教を受けるものは實に幸福である。容易には佛の道にあふことを得ず。われ作佛して經法を説きもろもろの欲をさり、衆の惡の源をふさぎ、いまだ度せざるものを度し、生死と泥洹との道を決正す。みろくよ汝も其他の數しれぬ人々も永劫より六道に展轉して憂畏勤苦との具に言ひつくさざるほど受けて今世にいたるまで生死にさまよひたり、

しかるにいま佛に相あうて經法をき、あみだ佛を聞くことを得たり。快ひかな甚だ善し、われ汝らを助けて喜ばしむ。汝らいま自らこの生死老病の痛苦ある身をいとふべし。惡露不淨にして樂むべきものなし。よろしく自分決斷すべし、身を端し、行を正して益々諸善を作し己を修め能く深くし心の垢を洗除し言行忠信にして表と裏と相應すべし。人能く自分の信仰が自分を度のである。精明に求願て善本を積累ば、一世の勤苦は須更の間なりといへども後には無量壽佛の國に生じて快樂極りなく永く道徳と合明し永く生死の根本を抜きまた貪患愚痴苦惱の患ひなしと、汝ら各々精進して心の所願を求よ。疑をおこし中に悔て自ら過咎を爲こと勿れ。

右は御經をぬき書し和譯して書きしるして進る、御よみなされかし。

彌陀の光の外に心靈界を照すものなし。一向にまごころをもて御名を崇めみだのみひかりの中に攝取せられんことをいのりたまへなむあみだ佛。

電報にて御老人の御命終のことこけたまはり候たり稱名の聲をもてこれにこたふるのみ。仰ぎ願くば彌陀大光圓かに照したまひて彼の眞界を明にし、慈悲もて攝受したまはんことを。

無始曠劫來の無明生死の夢さめて、無爲泥洹の淨國に神をうつし、金蓮ひらきぬる時、彌陀の聖容を瞻仰したてまつり、彌陀の心水は身の頂に沫し、觀音勢至は衣を與えて被せしむ。

何ぞ憂ふべきこの苦穢の身を脱することを。悦びに勝えんや彼の法性の常樂を證すること。

露の身は消えにけらしも今よりは

こゝろは花の上にやどりつ。

上もなきはなのなかばをわけよかし

やがてゆくべき我のためにと。

なきひとの御手むけとしては唯稱名よりほかにこれなく候得ばひたすら念佛したまへ。

彌陀のひかりはかの靈界を照したまふ。なむあみだ佛。

### 光明家庭の心得

- 一、父母は慈悲と正義の觀音勢至にて實行の範を以て子女を光明に指導すべき事
  - 一、各自に暗黒の氣質を淘汰し光明の本心に基き平和たるべき事
  - 一、怨恨等を發し衝突を爲すは光明を失ふ故なりと覺知すべき事
  - 一、光明に充されてはいかなる場合にも麗しき色を變へざる事
  - 一、光明の時間を貴重し徒らに過すべからざる事
  - 一、日々業務は如來の命令と信じ潔よくつとむべき事
  - 一、如來の試験は日常行爲の上にある事を記憶すべき事
- 晨には今日一日の如來に身心を献げて事へまつることを告白し夕には一日いかに行為せしやを吟味し益々向上せんことを要す。闇黒の家に犯罪の卵子は發生し、光明

ある家庭に善良の士女育成す、聖典に悪人は悪をなし冥より冥に入り苦より苦に入る善人は善をなし明より明に入り樂より樂に入ると示し給へり。

### 光明會趣意書

この教團は如來てふ唯一の大御親を信じ、其慈悲と智慧との心的光明を獲得し。精神的に現世を通じて永遠の光明に入るの教團なり。其大御親とは宇宙唯一の靈體にて心靈界の大日輪なり。

明治天皇の『朝な夕なみおやの神に祈るなり我が國民を守り玉へ』と。『目に見へぬ神のこゝろに通ふこそ人の心の誠なりけれ』との御製は長くも其御消息と拜し上らる。また孔夫子が天道と呼玉ひし同じく唯一の大御親の別號に外ならずと信す。

凡そ一切の人類は其大御親の分子たる佛性は具すれども大御親の慈悲と智慧との光明によらざれば靈性を顯彰すること能はず。

この永遠不滅の靈活なる大御親の實在と其真理なることを實證し給ふ教祖釋迦牟尼

佛は殊に明かに其大光明に接觸するの道と云ふべき八萬四千の法を説き給へり。

この大光明を八萬の方面にわたりて教へ給ひしは恰も太陽の光は一なれども照らさるゝものは無量なるが如し。されば吾人が佛陀の教に信賴して信念功を成る時は必ず靈的光明に感觸して無明の夜あけて光明界中の人と成りぬべし。

然してこの光明中の人となれば自かち大御親の聖寵により清き心の御子となるが故に相互に眞實親愛の情を以て相待するに至るべし。

人たるものこの天地間に生をうけ萬物の靈長たり此光明を獲得せずして可ならんや。曾て聞けり世の進化の順序は噲へば人の道を歩行するに兩脚の互に運びて進むが如しと。

人の精神の働らきを内外 兩面に分ては先づ教育政治等のすべて外部に向つて働べき方面とまた宗教家庭道德等の内部に向つてつとむべき方面とあり。

願ふに今や吾國民は外部の文明は長足の進歩を以て發達し今日の隆盛を見るに至れり。

是よりは宗教及び道德等の方面に於て大に進むべき時期到來せり長ちく眠り居りし國民の内的靈性が覺醒せざるべからざる 曉は近けり。

宗教は人類の内的生活を高尚にしてまた正善にし且幸福を感せしむるものなり。こゝに於て吾人は時期相應の信仰的團體を結び共に教理を研究しまた信念を修養して互に相提携し眞理の大御親の聖意に稱ふ清き同胞として光明の裡に生活し現在を通じて精神的に永遠の淨界に進行するを目的とせん。

願くば吾が敬愛せる清き同胞衆生よ。吾人は相互に弟たり兄たり。共に携へて大御親の光明の大道を進まんことを望むものなり。茲に教團を結び其目的を達せんと欲する所以なり。

首唱者

佛陀禪那辦榮

大阪の中央光明會

○本會は、清き信仰の友の集りでありますから、別に會則を設けません。

○本會は、別紙趣意書の如く、明治大正の大宗敎家、佛陀禪那辨榮上人の首唱による光明主義を奉じて、信仰生活する事を以て目的とするのであります。光明主義とは、日本に於ける眞の宗敎建設者たる法然上人の眞精神を明るみへ出されたのであります。

○光明主義が専ら信行いたします『南無阿彌陀佛』とは、どうぞ親切の大御親様（無量壽一生の源、無量光一育の泉に在す）お助け下さいと云ふ事であります、決して縁起の悪い事でも、又死するためでもありません、眞實に生きるためであります、ま心でお念佛申す時、直に活き／＼した明るい氣持にさして頂く事が出來ます。

○これ等の事は、本會へ御參會の上、御話を聞いて御修養下さいましたら、段々と明るくなつて參ります。

○本會は、光明主義に基き信仰生活をなすを以て、無上の幸福なりと信するものであります、御一人の幸福は唯御一人だけの幸福ではありません、家庭全體の幸福であり、一家庭の幸福は、即ち國家、社會の幸福でありますから、何卒御一名にても多く御誘合せ下さいまして、眞剣に御修養下さいますやう御勸めいたします。

○光明主義は、老幼男女を問はず、萬人等しく生きるの眞實道であります、今現に國家、社會の中堅たり、又將に其中堅たらんとする青壯年（男女）諸氏の、御來會を特に歓迎いたします。

○本會員にして、既に御入信の方は、「自分の信じた法を人に傳へるのが眞實の佛恩報謝である。」と申してありますから、御自分で味はれたお念佛の貴さを、是非未

信の方に傳へ相導き、共に、如來光明の大道をお進みの程を切に御願いたします。

○本會は、時代の要求に應じて生れたのであります。

○『中央光明會』としては、生れたての赤子でありますから、皆様の熱い御同情に依りまして、健全なる成長發展をいたしたく存じます、何卒御應援の程を願上ます。

○本會の例會を、毎月第一第三の日曜日午前八時より午後八時まで開催いたしますから、其時間中、何方様（會員外の方も）も御隨意御參會下さい。

○會場は、例會の前日迄に御通知いたします。

○服装は絶対に華美をさげ、質素清淨に願上ます。

○食事の場合は其前後に合掌十念して下さい。

○會費は要りませぬ。當日の食料費として金參拾錢御任意に喜捨箱へ御入れ下さい。

○毎月の例會の外に、時々特別念佛三昧會を開きます。

○本會へ御入會御希望の方は左記へ御申込下さい、毎會御案内申上ます。但し入會金は要りませぬ。

中央光明會

事務所 大阪市東區小橋寺町

成道寺中

大正十三年七月十日印刷同月二十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢 年十二冊貳圓

編輯兼發行人 山崎 辨 成

印刷人 東京市小石川區茗荷谷町三十七番地 中川 退 司

發行所 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社

振替東京六六八五一番